

## ウッドデッキワークショップ

### 対話型企画第2回「未来を描ききっかけを作ろう」報告書

---

#### 開催概要

- 日時: 2024年11月16日(土)午前10:00-12:00
  - 場所: 横浜市立大学 YUC スクエア
  - 内容: 第二回大学生・高校生と先輩研究者の対話会
  - 形式: 3つの部屋に分かれた対話形式
  - 参加者人数: メンター6名、学生20名
- 

#### 趣旨

本ワークショップは、世代の大きく異なるメンターと学生が対話を通じて、未来を描ききっかけをつくることを目的としている。研究や大学生活で感じる疑問、時代の変化とともにどう生きるべきかを議論し、それぞれの経験や視点を共有する場となった。学生は、普段聞けない深い話やキャリアに関する実践的なアドバイスを得る機会となり、メンターも若い世代の率直な意見に触れることで新たな発見を得た。

---

#### プログラム概要

3つの部屋に分かれ、メンター2名と学生グループがテーマに沿って自由に意見交換を行った。それぞれの部屋で議論された内容を以下にまとめる。

---

#### 部屋 1:カセム先生・森田先生

- 参加者: メンター2名、学生7名

#### 議論の内容

1. **メンターの経歴や経験談** カセム先生の多様なキャリア(微生物研究、都市工学、森の復元、、サンゴ、デバイス設計・データサイエンス研究)を基にした体験談が共有された。特に、研究の選択や挑戦に柔軟に、その場その場で大切な課題を見つけて向き合う心構えに注目が集まった。初めから博士課程にいくとはきめつけていない、むしろ行くつもりがなかったにも関わらず、その時々判断を大事にして進路を選択していったことなどが語られた。
2. **不完全性とAI** AIなどが大きく社会を変えていくなか、人間とAIの付き合い方についての議論が学生とメンターの双方から持ち掛けられた。不完全なAIの存在が人間に与える感情的な影響や行動変容の可能性について話し合われた。カズオ・イングロの「クララとお日さま」という不完全なAIと人間との友情に関する本のお勧めもあった。
3. **学問の本質と言語** 言語が持つ他者性や、AIが生成する平均化された表現が学問に与える影響について議論が展開された。人間が言葉を書くことの意味、伝えるときの言葉。AIは便利なツールとして使いながらも、生成された言葉は実際に口に出して読んでみて違和感があるところは修正するとよいという話なども交わされた。また、人と人の間の言葉を通じたコミュニケーションの奥深さ、過学習状態になったAIには作れない何か人間から創成される可能性について議論ができた。
4. **デザインとサイエンスの融合による未来への展望** 現代社会において、科学技術の進歩とデザインの創造性が交わる領域が急速に拡大している。従来は独立して考えられてきたデザインとサイエンスだが、これらを実社会で融合することにより、単なる機能性や美しさの追求を超えた新しい価値が生まれる可能性がある。デザインとサイエンスの融合の可能性について深く議論が行われた。



## 部屋 2: 山極先生・佐藤先生

- 参加者: メンター2名、学生7名

### 議論の内容

#### 1. 大学教育の意義

大学は、友達や仲間と「興味を共有しながら話題を引き出す」場としての役割を果たすべきであるとの意見が出た。本来、大学はこうしたコミュニケーションや新しい発見を通じて学ぶ場であったはずである。「物事に焦点を合わせる必要がある時代において、過剰で膨大な情報があることが逆に学びを妨げる場合がある」という指摘があった。授業や学びの場は、基礎的な情報を提供する一方で、その情報をうまく選別し使う能力を育むべきであることが議論された。

#### 2. 海外経験の重要性

留学や海外での経験については、「英語力を早期に鍛えることが重要」というアドバイスがあり、英語力向上は論文執筆時にも大きな助けとなるとの意見が出た。また、英語や言語の在り方に関しては、「言葉がたどたどしい時代の方が相手は優しくなる」という点が挙げられ、完璧を求めず積極的に挑戦する姿勢が大切だとされた。

#### 3. 論文作成と研究の進め方・言葉による議論の役割

- 論文作成に関して、「いかに面白いことを考えついたか」が重要であり、「論文にしない方法も選択肢としてある」という意見が共有された。曖昧な概念については、議論を通じて確認し、明確にしていくトレーニングの場が必要である。情報過多の中では、「論文として発表されたものは、むしろ confirm(確認・検証)するためのもの」であり、まだ固まっていない未完成なアイデアについて研究室内の他者と自由な議論をしながら焦点を絞る能力が求められる。チームワークについては、「まだ論文になっていないアイデアを共有し合える仲間」や「お互いに面白いと感じられることを話し合える関係性」が重要とされた。アイデアを出した人を尊重する文化が必要である。

人間は「視覚優位」であり、写真や映像では不十分で、言葉によるストーリーや因果関係が必要である。一方、SNS では切り取られた情報が主流となり、十分な文脈が失われる点が問題視された。

#### 4. 懇親会の意義

学会のススメとして、特に懇親会などの交流の場は、「話すこと、聞くことを学ぶ場」として非常に重要である。聞き耳をたてても問題なく、いつだれとでも話し合える場である。メンターと学生間の対話や、研究者同士の情報交換が、個々の学びや発展に寄与することが強調された。

#### 5. 時間の使い方

時間を効率的に使うことの重要性が共有され、「自分が動けば他人も動く」という視点が議論された。「自己実現」だけでなく「他者実現」や「共同実現」を考える時代に来ているのではないかという提案がなされた。



### 部屋 3: 渡辺先生・横山先生

- 参加者: メンター2名、学生6名

#### 議論の内容

##### 1. 博士号取得に関するアドバイス

渡辺先生と横山先生それぞれのキャリアにおける博士取得過程における経験や、研究室選択の重要性について具体的な助言を行った。博士の学位が海外では特に別格に見られる体験なども語られた。

- ##### 2. 研究室選びについて
- 学部生も多かったため、研究室選びについてもアドバイスされた。研究内容だけではなく、指導教員との相性や研究室の雰囲気的重要性なども話された。

- ##### 3. 大学の授業の意義
- メンターから、大学の授業について以下のような意見が共有された。大学の授業は、学生には一見退屈で押し付けられているように感じられるかもしれないが、実際には基礎的な情報を提供しており、後々役立つ重要な土台となるものである。特に、授業で学んだ内容は、「必要になったときに調べられる素地」となり、自ら学び直す際に非常に有用であることが強調された。

- ##### 4. 高校教育における実験の現状
- 学生から、現在の高校教育における実験機会の多様性について意見が出された。一部の特別科学学級(SSH)では頻繁に実験を行う一方で、多くの高校では実験の頻度が少なく、コロナ禍による影響もあってさらに制約を受けたとのことだった。また、中には夏休み期間のみ有料で実験を実施する学校もあるという報告があった。日本の高校教育において実験の機会が減少している現状を課題として指摘した。その背景には、大学入試に重点を置いた教育体制があり、実験教育が軽視される傾向があることを議論した。

- ##### 5. 海外留学のタイミングと重要性
- 学生からは、海外留学の適切なタイミングや形式について具体的な質問が寄せられた。早期に行くべきか卒業後が良いのか、短期留学と長期留学のどちらが適しているのか、留年をしてでも行く価値があるのか、という疑問が提示された。これに対してメンターは、まず、英語学習は早期に始めるべきであり、特に英語力向上は論文執筆においても大きく役立つと述べた。また、留学が可能な環境にある場合には、チャンスを逃さず積極的に取り組むべきであるとされた。さらに、英語を話す際には自分の身近なことや日本文化について説明できる能力が求められるため、その準備も重要であると助言があった。



---

## 参加者の声

ワークショップ後のアンケートで寄せられた参加者の感想や意見を以下にまとめる。

### 1. 印象に残った話題や学び

- メンターからのアドバイスが非常に参考になった。特に渡辺先生と横山先生の博士課程に関する話は具体的で実践的だった。
- 学会や分野を超えた学びの重要性が腑に落ちた。
- 「研究室の選択は、研究内容だけでなくその環境に合うかどうか重要」という話が心に残った。
- 「好きなことをして生きる」という生き方に感銘を受けた。
- SNS 時代におけるコミュニケーションの課題や、情報過多がもたらす不安についての議論が印象的だった。

### 2. 今後の対話の場の企画案

- 一対一の対話の場を設ける企画。
- 事前に学生の興味のあるテーマを募り、当日メンターがその場でテーマを選ぶ形式。
- 学生と教員と一緒に参加する運動会や食事会などの非公式な交流イベント。

### 3. 全体の感想

- 「今回のワークショップは、自分の将来を考える上で非常に有意義だった。」
  - 「普段は得られない経験を積むことができた。ぜひまた参加したい。」
  - 「メンターの方々だけでなく、他の学生の考え方や意見を聞いたのがよかった。」
  - 「好きなことを突き詰める姿勢が印象的だった。」
  - 「研究とキャリアの進め方に関する具体的なヒントを得た。」
- 

### 成果と今後の展望

本ワークショップは、世代間の対話を通じて、研究の進め方やキャリア選択に関する有益なアドバイスが得られる場となった。また、学生たちが日常生活では触れることのない知見や視点を共有することで、将来を考えるきっかけを提供した。

今後も、このような異なる世代や分野の間で対話を深める場を設けることで、若い世代の成長を支援し、学問の発展に寄与する取り組みを継続していく。